

説話研究の現在

竹村信治
(たけむら・しんじ)



〈知〉の総括の時代である。総括されるのは近代の〈知〉ばかりではない。近代の眼差しによつて作られたあらゆる「物語」(II言説)が検証され解体されていく。眼差しの検証、「物語」の解体、そして現代の〈知〉は諸科学を動員した考古学的考察、特に文化総体の構造分析、文化事象間の多元的な関係とその動態の観察を通じて、人間の〈知〉の様態を新たに捉え返そうとしている。

説話研究の現在はこうした現代の〈知〉の動向と無縁ではない。近代の作つた「物語」の一つである〈文学〉、また〈文学〉の「物語」の一エピソードとしての〈ジャンル〉の解体は説話においてより明瞭に進行しているといふべきだろう。そこでは脱領域的に流通した説話の生態がもつぱら関心の対象である。そして、さまざまな文化事象と結んでそれらが扱つて立つ世界像を形あるものとして示したり、翻つて世界を認識し解説するあるいはさせる媒体として機能したりした様態が多くの事例をもつて検証され強調されるに及んで、説話は文化総体の構造の表象、文化事象間の多元的な関係とその動態を映し出す言語事象として新たな位置を占め始めている。それはもはや閉じた一領域ではなく、〈知〉の考察へと開かれた窓、しかもとりわけ可能性に満ちた窓となつているのである。

もつとも、このような説話研究の現在は西欧の〈知〉をめぐる

議論の影響下に用意されたばかりではない。一方では、領域化した説話研究がそうした説話観の拡充を必要とするところに展開していた事情もあつた。説話研究の現在はこの両者の出会いを通じて混沌のうちにも新たな視界を開きつつあると観察されるが、以下に後者の、特にこの十余年の研究史を辿り直すことでその動向を概観しておく。

*

小峯和明「今昔物語集の形成と構造」(85年)、森正人「今昔物語集の生成」(86)が「今昔」研究ばかりではなく説話研究の画期をなしたことは大方の認めるところであろう。周知のとおり、戦後まもなく〈文学〉の「物語」に参入すべく益田勝実・西尾光一らによつてなされた説話と説話文学との差異化は、口承世界の説話を後景に退け書かれた説話、特に説話集の説話を前景化してこれを説話文学研究の対象とするに至る。上記二著書はそうした説話集研究時代の視点と方法を集約した業績として画期をなす。と同時に、〈文学〉の発掘認定を主題化したそれまでの研究から脱して、説話と説話集をそれが語られ書かれ編まれた時代状況において捉え、表現世界や生成の機構を情況と向き合う主体による世界解釈、世界像構築へむけた言語的営みに即して読み解こうとする新たな方向性を示した点

で、もう一つの画期をなす。説話研究は説話集の〈文学〉研究の果てに、こうして説話の生誕、機能、表現性、表現機構をめぐる社会学的思想的言語論的考察へと転回しはじめたのである。

しかしそうした説話研究の転回は、当然のことながら両氏の独創によってのみなつたのではない。系譜上の直接的な脈絡は「今昔」の組織性に着目して作品生成の根源を見つめようとした国東文麿、「今昔」のテキスト表現に密着して表現性を追究した池上洵一との関係に求められるが、そのような中心化した〈説話文学〉研究の周縁部で脈々と続けられた〈説話〉研究も少なからずこの転回に関与していた。すなわち説話が情況と関わりつつ生きて働く場としての儀礼や唱導世界、教義注釈への視界は折口信夫・筑土鈴寛・宮崎円遵・岡見正雄・永井義憲・伊藤正義らによって開かれ続けていたし、また語る行為とその機能については民俗学の領域での柳田国男以来の口承文芸研究が相応の成果を示し、さらに絵解きとの関係も川口久雄らの手で開拓されていたのである。これらはいわば説話集に〈文学〉が追い求められていった時代に後景へと退けられた視点であったが、70年代以降、浄土教をめぐる思想史研究とリンクした往生伝や鎌倉期仏教説話集の研究が活発化して、説話と時代の思想情況との相関、説話が語り用いられる場や機能への関心がたかまるとしだいに前景化し、80年代以降、小峯・森らの世代の研究視点の一つとして組み込まれ、継承されていったと見られるのである。

もちろん、80年代以降におけるこうした周縁研究の前景化には、脱中心脱領域脱境界化が進んだ当時の時代思潮も大きく関

わつていよう。特に文化人類学、歴史学の動向は説話研究に直接作用したものと忘れてはならないが、さらに先にも述べたとおり、領域化した説話研究が方法上そうした脱中心化を自ずから必要とするところに展開していた事情もあった。

説話集研究の時代、説話研究は芥川龍之介以来つづいていた話題内容本位の印象批評（野性美・人間性・リアリティ）を脱し、学問的装いをもった成立論と〈文学〉論をめぐる展開したが、前者は所収説話の伝承系統論として、後者は所収説話の固有の表現性追求として議論された。そこではいずれも所収話題と他資料所載の同一説話との比較が方法とされ、前者は類似度に注目し後者は差異に着目して、いわば類似のなかにある差異の検証のうちに成立と〈文学〉が説明された。これは伝承性を本性の一つとする説話と近代的な主体幻想の所産でもある〈文学〉観とが折り合いをつける唯一の方法でもあったわけだが、こうした研究においてはより厳密な比較が不可欠で、説話集研究は必然的に比較対象たる同一説話の発掘、つまり資料探索に向かうことになる。しかしこの資料探索は同一説話の発掘とともに説話世界の広がりやその生誕への視界を研究主体に開くことになった。説話はいわゆる説話集などの説話集成文献のみならず、唱導・事相書・法門口伝・抄物・直談・談義・神道書・太子伝・仏伝・神社縁起・絵解きといった宗教世界の諸資料をはじめ、縮素学問世界の注釈、和歌歌学や物語の注釈書、管絃楽書、絵画（絵巻／奈良絵本／參詣曼陀羅）、芸能、儀礼（法会／即位灌頂／古今伝授、等）、歴史書などに見出されるほか、和歌や漢詩文、物語小説、語り物、謡曲の素材モチーフとして利用され、和文漢文の日記類にも記し留められている。

そしてそれらはそれぞれの場でそれぞれの場に応じた意味を担い、意味にふさわしい形を整えて書かれ語られている。このような説話の実態は、説話集の説話を相対化させるに充分であろう。さらにこうして時代の言説空間に流通弘布し機能する説話を目の当たりにする時、説話集の説話を説話が息づく世界に据え直して見ることはもちろん、説話の流通機能する世界そのものの考察の必要を考えさせよう。とともに説話集に、したがって「文学」に還元できない説話の、そして説話研究の「文学」を越える社会学的思想的言語論的な問題領域に開かれた可能性を発見させよう。領域化した説話研究が自ずから脱中心化を必要とするところに展開していた事情とはこのようなことである。後景にあった「説話」研究が前景化した理由はここにもあったのである。

さてこのようにして説話研究の現在は、説話の息づき流通機能する世界を対象とした社会学的思想的言語論的考察へと転回している。その具体は、91〜93年に刊行された「説話の講座」全六巻（勉誠社刊）。1「説話とは何か」、2「説話の言説―口承・書承・媒体―」、3「説話の場―唱導・注釈―」、4「説話集の世界I―古代―」、5「説話集の世界II―中世―」、6「説話とその周縁―物語・芸能―」、現在刊行中の「説話論集」（清文堂刊）。1「説話文学の方法」、2「説話と軍記物語」、3「和歌・古注釈と説話」、4「近世文学と説話」。以下予定、5「上代文学と説話」、6「仏教と説話」、7「中世説話文学の世界」に収載の諸論稿によって容易に知ることができる。また単行の書としては小峯和明「説話の森」（91）、論文では本田義憲「今昔物語集の誕生」「辺境」説話の説」（日本古典集成

『今昔物語集』一・二「解説」、78・79）が参考となろう。これらは現在の説話研究の全体と関心の寄せ方を見通す便宜を与えて有用だが、さらに叙上の説話が生きて働く実体的な場面に即した考察論著には、絵画・絵解き関係に林雅彦「日本の絵解き」（82）、徳田和夫「絵語りと物語り」（90）等、唱導・語り物・芸能関係に福田晃「中世語り物文芸」（81）、兵藤裕己「語り物序説」（85）、広田哲通「中世仏教説話の研究」（87）、美濃部重克「中世伝承文学の諸相」（88）、今成元昭「仏教文学の世界」（88）、桜井好朗「中世日本の王権・宗教・芸能」（88）等、中世小説類に福田晃「神道集説話の成立」（84）、徳田和夫「お伽草子研究」（88）等、学問・注釈関係に黒田彰「中世説話の文学史的環境」（87）、「同 続」（95）、牧野和夫「中世の説話と学問」（91）、山崎誠「中世学問史の基底と展開」（93）、広田哲通「中世法華経注釈書の研究」（93）等、漢文学関係に増田欣「大平記」の比較文学的研究」（76）、渡辺秀夫「平安朝文学と漢文世界」（91）等、宗教儀礼関連に田中貴子「外法と愛法の中世」（93）、山本ひろ子「変成譜」（93）等がある。ただし、こうした具体的な場に即した考察は現在なお進行中で、右に掲げた諸氏はもちろん、思想史領域の吉原浩人・曾根原理・伊藤聡等、歌学領域での川平ひとし・錦仁・山田洋嗣・三輪正胤・西村加代子等の諸氏論考など、雑誌・論集・講座類に発表される論稿に注目すべきものが多い。その実際は上記「説話の講座」各巻末尾の文献目録、「今昔物語集年報」（笠間書院）所載の目録を参照されたいが、寺社宝蔵の筐底から価値の再発見をもって選り出された新資料の紹介を含め、そこに引かれる論文の多さは斯界研究の盛況ぶりを窺わせている。

*

以上、説話研究の現在を過去十余年の研究動向を振り返りつつ概観した。〈文学〉の病癒えその生態に即して説話と向き合うところによく到達したというところだろうか。さまざまな文化事象に息づき、語る主体の世界像を形あるものとして示したり、翻って世界を認識し解読するあるいはさせる媒体として機能した説話。叙上の諸研究はそうした説話の生態と向き合うなかで、仏教学、神道学、思想史学、社会学、歴史学、芸術学（芸能・美術）、民俗学、言語学等々の関連諸科学と連携しつつ、時代の社会的文化的思想的相貌を明らかにしようとしているものごとくである。

ただこうした研究動向に問題がないわけではない。確かにさまざまな文化事象に息づき流通機能する説話は文化総体を表象するかに見え、それゆえこうした説話を媒体として時代の社会的文化的思想的相貌を、ひいては時代の想像力や〈知〉の様態を窺うことも可能であるように思われる。しかしそうした予見は、説話の言説としての機能（権力）への配慮を怠るものである。言説は社会や文化、思想、イデオロギー情況の反映としてではなく、むしろそのようではない事態情況にむけた戦略的な再生、更新、創出として常に立ち現われる。言説が現われる場ではいつも何か（あらためて／あらたに）創られ何か（あらためて／あらたに）排除されようとしているのである。したがって説示性をもう一つの本性とする説話は、語られ書かれるまさにその時に、担わされた意味をもって何かを（あらためて／あらたに）創り出し何かを（あらためて／あらたに）排

除しようとしていると知るべきである。このように考える時、説話が文化総体の表象でも時代が共有した想像力や〈知〉の様態を伝えるものでもないことは明らかだろう。あえていえば文化総体を見せ掛け想像力や〈知〉の様式化を目論み仕組むものこそが説話であった。そのことに無自覚なままに説話研究を民族研究や文化研究にスライドさせては、戦前の説話研究同様ナショナリズムの陥穽に落ちることとなる。説話研究は民族研究でも文化研究でもありえない。説話が世界像を見せ掛け想像力や〈知〉の様式化を目論む言説である以上、説話研究はその言説としての構造、機構、機能を明らかにし、むしろそうした民族・国家・文化をめぐる幻想を相対化し解体する意義を担っている。この意味で説話研究とは言説研究の別名でもあったのである。こうした観点に立つ考察には、すでに阿部泰郎の日本紀論や王権論、兵藤裕己の語り物論や神話論、田中貴子『悪女論』（92）、同『百鬼夜行の見える都市』（94）、深沢徹『中世神話の煉丹術』（94）、小川豊生の院政期諸領域を横断する言説論があり、前掲小峯・森著書を承けた前田雅之・荒木浩・山口真琴らの説話集論がある。今後の説話研究は、文化史研究という名の混沌に明瞭な道標を刻むこれらの諸研究に導かれる形で、〈知〉の考察に向けた言説研究として展開していくことになろう。

※なお、説話研究の現在については小峯和明「説話研究の現在」〔説話文学研究〕29、94・6、前田雅之「説話」（仏教文学講座6「研究史と研究文献目録」所収、勉誠社刊、94・8）があり、研究展望に便宜を与えていることを付記しておく。

—— 広島大学助教授 ——